

平成期中学校国語教科書における読み物教材の採録状況

鳴門教育大学 幾田 伸司

キーワード：中学校教科書、読み物教材、教材史

1. はじめに

国語教科書の採録教材は、学校教育の中で学習者が学んでいること、また大人が学習者に学ばせたいことを反映している。それゆえ、どのような教材が採録されたかを検討する教材採録史は、教科書史研究の一環として一定の関心が払われ、研究が蓄積されてきた(*1)。

近年は教材目録の整備が進み、採録教材を網羅した目録も刊行されている(*2)。採録状況を検索することが容易になり、研究の重点は、作家や作品をしぼって採録背景、採録に影響を持つ隠れた言説や思想を緻密に検討する質的な研究に移行している。一方で、これらの目録は作家、作品を見出し語として検索するように構造化されているため、教材採録状況の全体を俯瞰することが難しくなった。ジャンルごとの採録状況、時期ごとの採録傾向や教材の異同などは目録から直接検索することができないため、調査研究が滞っている面もある。

そこで本稿では、昭和 62 年度～令和 2 年に刊行された平成期の中学校国語教科書について調査を行い、読み物教材の採録状況を概観することを試みる。調査対象を平成期の中学校教材としたのは、以下の理由による。

- 1 中学校昭和期の文学教材については安藤修平(1987)、幾田伸司(1992)など、説明文教材については金子萌(2013)、幾田伸司(2021)などの検討があるが、管見の限りでは、平成期の中学校教材採録の全体像を記述した報告がないこと。
- 2 平成期はジャンル意識がある程度確立し、教科書中にジャンル区分が記載される教材が増えているため、分類・整理が比較的行きやすいこと。
- 3 教科書を刊行する出版社が固定し、教科書検定も同じ年に行われるため、教材の差し替えが同じ年に行われ、変化が分かりやすいこと。
- 4 中学校は執筆者が記名されている教材が多くなり、採録傾向が検討しやすいこと。

中学校教科書の発行は、昭和 55 年度から東京書籍、学校図書、三省堂、教育出版、光村図書の 5 社のみになっており、S62 版から H28 版まではこの 5 社から 8 種の教科書が、R3 版では学校図書が刊行をやめて 4 社 4 種が刊行された(*3)。そこで本稿では 44 種 132 冊の教科書について教材調査を行っている。それぞれの版の教科書が準拠した学習指導要領と、使用された年度は以下の通りである。

準拠指導要領	教科書使用年度	教科書種数
S52告示	S62 ～ H元	5
	H2 ～ H4	5
H元告示	H5 ～ H8	5
	H9 ～ H13	5
H10告示	H14 ～ H17	5
	H18 ～ H23	5
H20告示	H24 ～ H27	5
	H28 ～ R2	5
H29告示	R3 ～	4

今回は、これらの教科書から以下の基準に沿って教材を収集した。

- 1 目次に記載された教材の中で作者・筆者が記名されているもの。ただし、以下の教材は、記名であっても収集対象から外した。
 - ・言語事項、言語文化、言語活動等について解説した文章。
 - ・韻文や古典についての鑑賞・解説文。
 - ・作品の一部のみが引用紹介されている場合。
(冒頭文のアンソロジー、季節の言葉など)
- 2 小説や図書の一部が一ページ以上の分量で引用されている場合。
- 3 鑑賞・解説文中で全文が引用されている詩。
本稿では、上記の基準で収集した教材を、「物語」「詩」「説明文」「随想」「ノンフィクション」に整理した。ジャンル分けは原則として教科書の記載に

基づいているが、教科書での表記は多様なため、およそ以下のようにまとめている。

物語：小説、物語

説明文：説明、論説、評論、記録（研究データ）

随想：随筆、随想

ノンフィクション：ルポルタージュ、番組シナリオ、伝記、記録（出来事）等

教科書中にジャンルの記載がない場合は、本文の叙述や指導事項から筆者が判断した。また、非文学教材（説明文、随想、ノンフィクション）はジャンル区分が曖昧であり、教科書によって分類が分かれた教材もあったが、筆者の判断で整理した(*4)。

2. 物語教材

今回収集した物語教材は、146 人の作家による 194 編、延採録数は 626 回であった。各版での採録状況は下記の通りである。

教科書	作者(人)	作品(編)	延採録数(回)
S62版	47	57	71 (4.7/冊)
H2版	44	56	69 (4.6/冊)
H5版	51	56	71 (4.7/冊)
H9版	54	61	75 (5.0/冊)
H14版	39	47	58 (3.9/冊)
H18版	42	48	63 (4.2冊)
H24版	48	58	77 (5.1/冊)
H28版	50	60	80 (5.3/冊)
R3版	40	44	62 (5.2/冊)
全体	146	194	626 (4.7/冊)

H9 版までの平成初期では、一学年あたり 4～5 編程度の物語教材が、理解単元と読書単元に採録されていたが、H10 年学習指導要領に準拠した H14、H18 版では各学年で 4 編程度に減少している。その後、H20 年学習指導要領準拠の H24 版で物語の採録が増えたように見えるが、これは H24 版以降では「付録」が拡充され、「資料編」が付されるようになったという教科書の構成の変更が影響している。資料編には、本編に入れられなかった既出教材などが数編収載されている。資料編は従来の読書教材の補充のような位置づけとなり、その結果、採録総数が増加す

ることになっている。

平成期の物語教材のうち、採録作品が 1 編の作家は 146 人中 112 人、採録回数 2 回以下の作品が 194 編中 137 編あり、7 割以上の作家・作品は単発、短期の採録であった。同時代の作家や翻訳作品も少なくなく、既存教材に頼ることなく、幅広く目配りされて作品が集められている。教材の異動が多く、一つの教材の採録期間が短いのは、登場人物の造型や状況などで、学習者の生活状況に合った同時代の設定を取り入れようとする志向が強いためである。

一方、延採録回数が 7 回以上であった作家 25 人について、作品別に採録状況を一覧にしたのが【表 1】である。周知のように「少年の日の思い出」（ヘッセ・1 年）、「走れメロス」（太宰治・2 年）、「故郷」（魯迅・3 年）の定番 3 教材には採録が集中しているが、これら以外で 3 社以上の採録があった教材は、以下の 5 編のみであった。

坊っちゃん（夏目漱石）	：5 社・19 回
トロッコ（芥川龍之介）	：3 社・16 回
握手（井上ひさし）	：3 社・15 回
形（菊池寛）	：3 社・11 回
最後の一句（森鷗外）	：3 社・9 回

物語教材全体としては、現代の作家を中心に採録作品が多様化する一方で、漱石、芥川、鷗外などの近代文学の作品に対しては採録が集中している。特に「坊っちゃん」は、H28、R2 版では全社に採録されており、すべての学習者が一度は目にする作品の一つになっている。「トロッコ」「形」は、一社が長期にわたって採録していた教材について、近年になって他社も採録を始めたものである。この二作はすでに評価が安定している作品なので、今後さらに採録が広がれば定番化する可能性もあるだろう。「最後の一句」は採録が途絶えた期間もあるが、H24 版から採録が再開した。「握手」も H18 版あたりから重複採録が増えており、平成後期以降での人気教材となっている。

これらのほかに、定番の 3 教材以外で 8 回以上の採録があり、長く採録され続けてきた教材は以下のとおりである。

東書	1 年	カメレオン (チェーホフ・9回)
	2 年	形 (菊池寛・8回)
学図	2 年	サーカスの馬 (安岡章太郎・8回)
	3 年	黒い雨 (井伏鱒二・8回)
三省	1 年	空中ブランコ乗りのキキ (別役実・9回)
		トロッコ (芥川龍之介・9回)
教出	1 年	オツベルと象 (宮沢賢治・8回)
	2 年	ベンチ (リヒター・9回)
	3 年	夏の葬列 (山川方夫・9回)
光村	1 年	大人になれなかった弟たちに…… (米倉斉加年・9回)

各社とも 3 教材以外に長期継続教材をもっており、それらと短期間で差し替える新しい作家の教材を組み合わせる教材の編成が図られている。

平成期で 3 編以上の作品が教材化された作家は、次の 13 人である。個々には採録数が少ない作品もあるが、概して教材としての人気が高かった作家群と言える。

杉みき子 (5編)	あの坂をのぼれば／塔のある風景—旗—／にじの見える橋／遠い山脈／飛べ かもめ
井上靖 (4編)	赤い実／わな／孔子／利休の死
星新一 (4編)	おーい でてこーい／繁栄の花／底なしの沼／たそがれ
宮沢賢治 (4編)	オツベルと象／水仙月の四日／銀河鉄道の夜／注文の多い料理店
芥川龍之介 (3編)	トロッコ／蜘蛛の糸／少年—海
あさのあつこ (3編)	風の唄／みどり色の記憶／花や咲く 咲く
今江祥智 (3編)	竜／麦わら帽子／暗やみの向こう側
内海隆一郎 (3編)	水曜日のクッキー／残されたフィルム／小さな手袋
重松清 (3編)	卒業ホームラン／タオル／電車は走る
野坂昭如 (3編)	凧になったお母さん／ぼくの防空壕／ウミガメと少年

別役実 (3編)	空中ブランコ乗りのキキ／愛のサーカス／寂しいお魚
森鷗外 (3編)	最後の一句／高瀬舟／木精
三木卓 (3編)	介添人／帰って行ったサルたち／おいのり

杉みき子は、学校や友人を題材にした作品が多く、平成初期まで幅広く採られてきた作家である。小学校でも教材化されており、一年生の教材になじみやすいが、現代的な設定の作品が増えていることもあって H28 版以降は減りつつある。星新一、三木卓は風刺色の強いショートショートで、平成初期に多く採られたが、H14 版以降は見られなくなった。SF やファンタジー、民話、社会風刺的なテーマの作品は一定の採録はあるものの、全体として多くはない。

あさのあつこ、重松清などの同時代作家の作品は、作品個々の採録数は多くないが、全体としては平成中期以降に増えている。他には、安藤みきえ「星の花が降るころに」、江國香織「デューク」、小川洋子「百科事典少女」、椎名誠「風呂場の散髪」「アイスプラネット」、瀬尾まいこ「花曇りの向こう」、田丸雅智「桜鯛」、三崎亜紀「私」などもある。同時代作家の作品については、近年、教科書書き下ろし教材が増えつつある。

書き下ろし作品は世評を経ていないため評価がつかみにくいリスクもあるが、テーマや分量を自由に設定できるというメリットもある。物語の採録では分量が制約になってしまうことも多い。調整しやすい書き下ろし教材が重宝される面もあり、これからも増えていくと思われる。

平成期の物語教材は、近代作家を中心にした評価が定まった作品を確保したうえで、同時代作家の作品や現代的な設定を敏感に取り入れた短期採録教材と組み合わせる構成が採られている。教科書書き下ろしの作品も増えており、教科書は同時代の人気作家の新作が発表されるメディアとしての役割も担うようになっている。

【表1 採録数が多い物語教材（作家・作品）】

作者	教材名	採 録 数 (回)										教材計	作者計
		S62	H2	H5	H9	H14	H18	H24	H28	R3			
太宰治	走れメロス	5	5	5	5	5	5	5	5	4	44	44	
魯迅	故郷	5	5	5	5	5	5	4	5	4	43	43	
ヘッセ	少年の日の思い出	2	3	3	3	3	4	4	5	4	31	32	
	クジャクヤママユ					1					1		
夏目漱石	坊っちゃん	2	1	1	1		1	4	5	4	19	26	
	吾輩は猫である	1	2	2	1		1				7		
芥川龍之介	蜘蛛の糸							1	1	1	3	21	
	少年—海							1	1		2		
	トロッコ	3	2	1	1	1	1	3	2	2	16		
森鷗外	木精							1	1		2	17	
	最後の一句							3	3	3	9		
	高瀬舟				1	1	1	1	1	1	6		
井上ひさし	握手			2	2	2	2	2	3	2	15	15	
宮沢賢治	オツベルと象	1	1	1	1	1	1	1	1		8	15	
	銀河鉄道の夜				1						1		
	水仙月の四日		1	1	1						3		
	注文の多い料理店					1	1		1		3		
安岡章太郎	幸福	2	2								4	14	
	サーカスの馬	1	1	2	2	1	1	1	1		10		
別役実	愛のサーカス		1	1	1						3	13	
	空中ブランコ乗りのキキ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9		
	寂しいお魚								1		1		
内海隆一郎	水曜日のクッキー		1	1		1					3	12	
	小さな手袋				2	1	1	1	1	1	7		
	残されたフィルム			1	1						2		
野坂昭如	ウミガメと少年						1				1	12	
	凧になったお母さん	1	1	1	1	1	1				6		
	ぼくの防空壕		1	1	1	1	1				5		
吉橋通夫	さんちき			1	1	1	1	1	1	1	7	12	
	ぬすびと面				1	1	1	1	1		5		
菊池寛	形	1	1	1	1		3	1	1	2	11	11	
杉みき子	あの坂をのぼれば	2	1					1			4	11	
	塔のある風景—旗—	1	1								2		
	遠い山脈							1			1		
	飛べ かもめ								1	1	2		
	にじの見える橋						1	1			2		
今江祥智	竜	1	1	1	1	1	1			1	7	10	
	暗やみの向こう側							1			1		
	麦わら帽子					1	1				2		
井伏鱒二	黒い雨	1	1	1	1	1	1	1	1		8	9	
	ジョン万次郎漂流記	1									1		
椎名誠	アイスプラネット							1	1	1	3	9	
	ふる場の散髪—続岳物語			1	1	1	1	1	1		6		
重松清	卒業ホームラン						1	1	1	1	4	9	
	タオル							2	1	1	4		
	電車は走る									1	1		
チェーホフ	カメレオン	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9	9	
山川方夫	夏の葬列	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9	9	
米倉斉加年	大人になれなかった弟たちに	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9	9	
リヒター	ベンチ	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9	9	
すやまたけし	素顔同盟			1	1	1	1	1	1	1	7	7	
辻仁成	新聞少年の歌					1					1	7	
	そこに僕はいた				1	1	1	1	1	1	6		

3. 詩教材

詩教材は、92 人の詩人による 194 編が延 458 回採録されている。各教科書の採録状況は以下のとおりである。

教科書	作者(人)	作品(編)	延採録数(回)
S62版	26	45	51
H2版	28	44	50
H5版	30	42	44
H9版	33	46	49
H14版	30	38	42
H18版	35	50	57
H24版	28	44	50
H28版	39	59	68
R3版	32	42	47
全体	92	194	458

詩教材は、鑑賞・音読教材のほか、巻頭詩や扉

詩、解説文中での引用、短詩の多重採録などもあるため、教科書による採録数の差が大きい。

これらの教材について、採録回数が多い詩人、作品を一覧にしたのが【表 2】【表 3】である。

【表 2】を見ると、谷川俊太郎（14 編 37 回）、吉野弘（8 編 34 回）、工藤直子（10 編 21 回）など、現代詩人が採録の中心であり、採られている作品も多様である。ただし、谷川、吉野、茨木のり子、新川和江、石垣りんなど、採録が多いのは S40 年代から採録されている詩人たちであり、同時代の新しい詩人はそれほど多くない。平成以降の新たな詩人の代表は工藤直子であるが、H10 年代以降で複数作品が採られる詩人は、他には木坂涼、長田弘などに限られている。新しい世代の詩人の中で、長田弘は 6 編が採られている。特定の作品に偏らず長期採録もないため採録回数は多くないが、今後広がっていく可能性はあるだろう。一方で、昭和期に一定数の採録があった高田敏子、黒田三郎、原民喜、真壁仁などは、H14 版あたりまでで採録が途絶えている。

【表 2 採録数が多い詩人の一覧】

作者	教材数	採 録 数 (回)									
		S62	H2	H5	H9	H14	H18	H24	H28	R3	計
谷川俊太郎	14	4	4	2	3	5	4	5	6	4	37
吉野弘	8	4	4	4	5	3	4	3	4	3	34
三好達治	7	7	3	1	1		3	4	5	3	27
新川和江	7	3	4	2	3	2	2	3	4	3	26
島崎藤村	3	3	4	2	2	2	2	3	3	3	24
工藤直子	10			4	6		3	3	3	2	21
草野心平	8	3	3	3	2	1	2	3	2	1	20
茨木のり子	8		2	2	1	2	3	2	3	2	17
高村光太郎	4	4	2	1	1	1	3	2	2	1	17
石垣りん	3	3	1		1		2	2	2	1	12

【表 3 採録数が多い詩教材一覧】

作者	教材名	採 録 数 (回)									
		S62	H2	H5	H9	H14	H18	H24	H28	R3	教材計
島崎藤村	初恋	2	3	2	2	1	2	3	3	3	21
三好達治	大阿蘇	3	3	1	1		1	1	1	2	13
高村光太郎	レモン哀歌	1	1	1	1	1	1	2	2	1	11
吉野弘	虹の足	1	1	2	2	1	2	1	1	1	12
茨木のり子	わたしが一番きれいだったとき		1	1	1	2	2	1	1	1	10
谷川俊太郎	朝のリレー	2	2	1		1	1		1	2	10
谷川俊太郎	春に	1				3	2	1	2	1	10
草野心平	河童と蛙	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
石垣りん	挨拶 原爆の写真によせて						2	2	2	1	7
新川和江	わたしを束ねないで	1	1		1	1	1	2	1	1	9
北原白秋	落葉松	1	2				1	1	2	1	8
中原中也	月夜の浜辺	1	1			1		2	1	2	8
新川和江	名づけられた葉	1	1		1		1		2	1	7

平成期の傾向としては、歌詞の採録が見られるようになったことも挙げられる。H10 年代では中島みゆき（2 編・3 回）に採録が重なったが、H24 版以降は「さくら（独唱）（森山直太郎）」「栄光の架橋（ゆず）」などに移っている。

【表 3】からは、H24 版以降、近代詩に採録が集まり出したことが読み取れる。「初恋（島崎藤村）」に採録が集まる他、「大阿蘇（三好達治）」

「レモン哀歌（高村光太郎）」「月夜の浜辺（中原中也）」「落葉松（北原白秋）」なども複数の教科書が採録した。H20 年学習指導要領で「伝統的な言語文化」が位置づけられ、音読や朗読などの言語活動が明文化されたことの影響を受けていると考えられる。

平成期の新しい教材は、吉野弘「自分自身に」、茨木のり子「鍵」、新川和江「センブリを採りに行

【表 4 採録数が多い説明文教材一覧】

作者	教材名	採 録 数 (回)										教材計	作者計
		S62	H2	H5	H9	H14	H18	H24	H28	R3			
桑原茂夫	ちょっと立ち止まって	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9	9	
河合雅雄	動物の文化的行動	1	1								2	8	
	若者が文化を創造する			1	1	1	1	1	1		6		
森本哲郎	「まあまあ」にみる日本人の心				1						1	8	
	イメージからの発想				1	1					2		
	香り	1									1		
	砂漠への旅	1									1		
	静かさについて	1	1								2		
	美への配慮		1								1		
内山節	普遍性							1			1	7	
	武蔵野の風景					1	1	1	1		4		
	歴史は失われた過去か							1	1		2		
呉人恵 (一ノ瀬恵)	「ありがとう」と言わない重さ			1	1	1	1	1		1	6	7	
	雨が大地に入る			1							1		
小関智宏	信頼をつなぐ							1			1	7	
	ものづくりに生きる					2	1	1	1		5		
	ものづくりの知恵						1				1		
富山和子	暴れ川を治める	1	1	1	1	1					5	7	
	森林のはたらき	1	1								2		
池上彰	全ては編集されている									1	1	6	
	ニュースの見方を考えよう							1	1	1	3		
	メディアと上手に付き合うために							1	1		2		
池上嘉彦	新しい世界をつくる言葉	1	1					1			3	6	
	言葉の始まり		1								1		
	動物の言葉と人間の言葉		1								1		
	なぜ「辞書」は「ひく」のでしょうか		1								1		
上田篤	五重塔はなぜ倒れないか						1	1	1		3	6	
	橋と日本人	1	1								2		
	潜り橋	1									1		
池内了	「新しい博物学」の時代						1	1	1		3	5	
	テクノロジーとの付き合い方						1	1			2		
伊藤和明	金星大気の教えるもの			1	1						2	5	
	地球環境の危機			1	1						2		
	湖は今	1									1		
高槻成紀	オオカミを見る目							1	1	1	3	5	
	生物が消えていく							1	1		2		
龍村仁	ガイアの知性					1	1	1	1	1	5	5	
早川文代	食感のオノマトペ					1	1	1	1	1	5	5	
安田喜憲	モアイは語る—地球の未来					1	1	1	1	1	5	5	

く」など、評価が定まった詩人の作品から採られることが多い。中でも谷川俊太郎「春に」、石垣りん「挨拶 原爆の写真に寄せて」は、複数の教科書が採録し、春の詩、戦争の詩としての評価が定まりつつある教材である。このように、平成期の詩教材は、新たな詩人の作品に広がるのではなく、既に採録されてきた近代詩と、評価が安定している現代詩人の作品を中心にして教材編成が行われている。

4. 説明文教材

説明文教材としては、説明、論説、評論のジャンル記載があった教材と、データに基づく仮説検証を行っている記録文を収集した。筆者数は 291 人、教材数は 348 編、延採録数は 593 回である。採録状況は以下の通りで、H5 版から H18 版までは相対的に少なく、物語と同様 H24 版から増加している。

教科書	筆者(人)	作品(編)	延採録数(回)
S62版	65	70	71 (4.7/冊)
H2版	63	72	73 (4.9/冊)
H5版	63	65	66 (4.4/冊)
H9版	61	63	63 (4.2/冊)
H14版	55	55	57 (3.8/冊)
H18版	57	60	60 (4.0/冊)
H24版	64	72	72 (4.8/冊)
H28版	63	67	67 (4.5/冊)
R3版	63	64	64 (5.3/冊)
全体	291	348	593 (4.5/冊)

延採録数が 5 回以上あった筆者 18 人について、採録状況を一覧にまとめたのが前ページの【表 4】である。中学校までの説明文教材は重複がほとんどないため、長く採られている教材の筆者が採録数も多くなる。桑原茂夫「ちょっと立ち止まって」が 9 回で最も多く、河合雅雄「若者が文化を創造する」、呉人恵「『ありがとう』と言わない重さ」、富山和子「暴れ川を治める」、龍村仁「ガイアの知性」、早川文代「食感のオノマトペ」、安田喜憲「モアイは語る」に 5 回以上の継続採録があった。

複数の文章が教材化されている筆者は、森本哲郎、内山節、小関智弘、池上彰、池上嘉彦、上田篤、伊藤和明などである。このうち、森本哲郎、池上嘉彦、伊藤和明は H9 版あたりまでの前半期に多く採られていたが、H14 版あたりから内山節、小関

智弘などが増え、H24 版以降では池上彰、池内了、高槻成紀に複数の採録が見られるようになる。また、【表 4】には挙がっていないが、鷺田清一（3 編・4 回）、野矢茂樹（4 編・4 回）、内田樹（1 編・3 回）等、高校教材に多く採録される哲学者の文章も近年には見られるようになり、前半に多かった森本哲郎や鶴見俊輔（2 編・4 回）などと交替している。

説明文教材の叙述内容は指導事項ではないが、学習者は文章を読む中で取り上げられている事象についての知識や考え方を知り、自身の考えを作っていく。説明文では、叙述内容も隠れた指導事項とみなせるであろう。そこで、説明文教材で扱われる話題を整理し、その傾向を検討した。検討にあたっては、内容に関わるキーワードを各教材に付し、そのキーワードを分類・整理して、カテゴリーを設定した。なお、叙述された内容は様々な題材に関わっているので、一つの教材が複数のカテゴリーに属している場合もある。この手順で設定したカテゴリーと、それぞれに分類した教材の編数を【表 5】にまとめた。

最も多かったのは、「動物」に関係する題材である。動物の生態から問題を設定し、データに基づいて解明していく探求型の説明文は、小学校でも最も多く、中学校でも低学年を中心に採られている。また、環境問題と関わって生態系の破壊について論じる教材も増えており、H24 版以降では複数の教科書がこのトピックの説明文を採っている。

次いで多いのが、「言語」について論じる教材群である。H2 版では池上嘉彦が複数の教科書で採られていたが、H4 版以降の筆者は多様になっている。トピックも、言語の働き、意味形成、使用、変化など、多様な観点から論じられている。

「思索・思考」は、よく生きるとはどういうことか、自分や友情とは何かといった哲学的な問い、ものの見方、考える筋道など、思想・思考に関わる題材群を括った。「生活」「文化」は身近な話題を取り上げ、深く掘り下げていく教材群である。特に H4 版以降では「文化」に括った教材群が増えており、動物園、図書館、遊園地などの大衆文化財を題材とする教材も近年には採られている。

「環境」をトピックにした説明文は、平成になって扱われるようになった。伊藤和明、安田喜憲など、採録が継続する文章もある。生態系の問題とも合わ

【表 5 説明文教材で扱われた題材】

カテゴリー	内容の例	教材数
動物	行動、構造、生態系	56
言語	役割、使用、変化	53
思索・思考	生き方、見方、自己	46
生活	暮らし、まちづくり	40
文化	大衆文化、もの作り	40
環境	環境破壊、生態系	33
社会	暮らし方、特徴	30
自然	自然現象、地球	18
メディア	テレビ、メディアリテラシー	17
芸術	美術、文学、漫画	17
科学・テクノロジー	科学技術、AI	14
伝統文化	食、建築、江戸時代	11
異文化	交流、異文化理解	10
身体	脳科学、生理	10
民俗	道具、ものづくり	9
国際	国際貢献、交流	9
コミュニケーション	ケア、他者	9
植物	構造、生態	8
建築	建物、橋	8
宇宙	天文、惑星環境	8
考古	縄文文化、探求	8
福祉	ユニバーサルデザイン、障害	8
日本論	考え方、社会	5
戦争	難民、戦争短歌	3
震災	耐震住宅、音楽	2
運動・スポーツ	障害者競技	2

せ、学習者がイメージしやすい社会問題として教科書での関心は高い。

H14 版以降に関心が高まっているのが「メディア」に関わる題材である。池上彰や菅谷明子を筆頭にして、「メディア」のあり方やメディアリテラシーを主題とする教材群が増えている。また、H17 版からは「科学技術・テクノロジー」を題材とする教材も複数の教科書が採るようになった。AI に代表される科学技術の急速な発達にどう向き合っていくかは、中学生も向き合うべき重要な課題となっている。

5. 随筆教材

随筆教材には、読むことの学習材のほか、記名されている巻頭言やコラム（読書案内など）も含めた。145 人による 189 編が延 337 回採録されている。内訳は下記の通りである。

教科書	作者(人)	作品(編)	延採録数(回)
S62版	33	35	37
H2版	30	32	34
H5版	38	40	42
H9版	29	33	34
H14版	30	33	35
H18版	33	39	42
H24版	33	36	39
H28版	29	33	37
R3版	28	34	37
全体	145	189	337

6 回以上の採録があった筆者の採録作品数と採録回数を【表 6】に、4 回以上の採録があった作品の採録数を【表 7】に掲げた。

説明文教材と同様、随筆教材も同じテキストが複数の教科書で採られることは少ないが、説明文教材に比べると採録が集中する教材が見られる。まず、向田邦子は 2 編 27 回の採録があり、そのうち 24 回が「字のない葉書」であった。「字のない葉書」は S62 版で 2 社、H18 版から 3 社、H28 版から 4 社と採録が増え、R2 版では全教科書に掲載されている。人物造形、事件の展開、構成などは物語に近く、筆者の知名度もあるので採録しやすいのだろう。平成後期以降の定番教材の一つと言える。加藤周一は 3 編 12 回の採録があるが、これは H18 版以降の教育出版の教科書で各学年の巻頭言として掲げられたために採録数が増えたものである。

5 編以上の文章が教材化されているのは工藤直子（7 編）、俵万智（5 編）、長田弘（5 編）で、3 人とも詩人・歌人である。複数の教科書に採られた作品は、「アラスカとの出会い（星野道夫）」「切ることと創ること（原ひろ子）」である。特に「アラスカとの出会い」は H14 版から採録が続いており、小学校教材とも連絡して、今後も継続していく可能性が高い。

【表 6 採録数が多い随筆教材の筆者一覧】

作者	教材数	採 録 数 (回)									
		S62	H2	H5	H9	H14	H18	H24	H28	R3	計
向田邦子	2	2	2	2	3	3	4	3	4	4	27
加藤周一	3						3	3	3	3	12
星野道夫	2					2	2	2	2	1	12
大岡信	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
俵万智	5			1	3	2	2	1			9
今道友信	1				1	1	1	1	1	1	6
手塚治虫	1		1	1	1	1	1	1	1	1	8
長田弘	5	1	1	1		1	2	1			7
工藤直子	7	1	2	1	1					2	7
原ひろ子	1	2	2	2	1						7
星野富弘	3	1	2		1	1				1	6

【表 7 採録数が多い随筆教材一覧】

作者	教材名	採 録 数 (回)									
		S62	H2	H5	H9	H14	H18	H24	H28	R3	教材計
向田邦子	字のないはがき	2	2	2	2	2	3	3	4	4	24
大岡信	言葉の力	1	1	1	1	1	1	1	1	1	9
星野道夫	アラスカとの出会い					2	2	2	2	1	9
手塚治虫	この小さな地球の上で		1	1	1	1	1	1	1	1	8
原ひろ子	切ることと創ること	2	2	2	1						7
今道友信	温かいスープ				1	1	1	1	1	1	6
猪口邦子	パール・ハーバーの授業			1		1	1	1	1		5
立原えりか	アイスキャンディー売り		1	1	1	1	1				5
オダネル, ジョー	目撃者の眼					1	1	1	1		4
加藤周一	言葉とは何か						1	1	1	1	4
	言葉の楽しみ						1	1	1	1	4
	日本語の特徴						1	1	1	1	4
鷺沢萌	ケナリも花、サクラも花					1	1	1	1		4
杉山竜丸	二つの悲しみ					1	1	1		1	4
西山登志雄	カバこそぼくの人生	1	1	1	1						4
星野富弘	風の旅	1	1		1	1					4

一方、「言葉の力（大岡信）」「この地球の上で（手塚治虫）」は、同じ出版社で長く採録されており、中学生に触れさせたい文章として定まった評価を得ている。また、今回はノンフィクションに分類した「碑（松山善三、S62～R2）」「壁に残された伝言（井上恭介、H17～R2）」などの平和教材も長く継続採録されており、これらも定まった評価を得ている。

6. おわりに

当然ではあるが、教科書教材には多彩な書き手による多様な題材の文章が集積されている。今回はジャンルごとに採録状況を検討したが、特定の教材への集中と、それ以外の教材の多様化の両面があり、顕著な特徴を見出せるとはい

いがたい。それでも、近代の文学作品を中心として採録が集まる傾向と、既存の作家や教材に依存せず、同時代の書き手や話題に敏感に反応し、取り込もうとする方向とを両立させようとする編集姿勢は見て取れよう。

物語教材では、各社ともに評価が定まった長期採録教材を確保する一方で、現代的な設定の同時代作家の作品を幅広く渉猟し、短期で差し替えていくことで、言語文化財の継承と学習への取り組みやすさとの両立を図っている。詩教材については、「初恋（島崎藤村）」など既出近代詩の再採録が進む一方で、評価の定まった現代詩人の作品から新教材を発掘することで、新旧のバランスを取っていた。説明文教材は、生物や言語に題材をとる文章の他、環境や科学技術

などの現代的課題を素材とする文章を積極的に教材化することで、学習者の問題意識や関心に働きかけようとしている。

平成期に新たに採録数が増えた作品としては、物語では「坊っちゃん（夏目漱石）」「トロッコ（芥川龍之介）」「握手（井上やすし）」「形（菊池寛）」「最後の一句（森鷗外）」、詩では「春に（谷川俊太郎）」「挨拶 原爆の写真によせて（石垣りん）」、随想では「字のない葉書（向田邦子）」などがあった。これらは、採録期間も長く、評価が定まっているので、新たな定番教材となっていく可能性があるだろう。

本稿では、作者・筆者と教材に注目して、採録状況の概要を素描することを試みた。一方、個々の教材で叙述されている内容については十分に検討できていない。教科書全体の採録状況を見通したうえで、個々の教材採録の背景や同時代の思潮などとの関連を検討する質的研究も必要である。今後の課題としたい。

【注】

- *1 幸田国広(2023) 参照。
- *2 戦後期の教科書教材目録としては、教科書研究センター編(1986)、阿武泉監修(2008)、日外アソシエーツ(2008)などがある。
- *3 教科書の記載は、ある年に刊行された教科書全体を指す場合は使用初年度に基づいて「S62 版」、特定の出版社のものを指す場合は「東書 S62 版」のように略記する。
- *4 「潜り橋（上田篤）」は、東書 S62 版では説明文、三省 S62・H2 版では随想に分類されていたが、本稿では説明文教材とした。

【引用参考文献】

- 安藤修平(1987)「戦後中学校国語教材の史的展開〈その一〉」（『国語科教育』34 集 全国大学国語教育学会 pp. 82-89）
- 阿武泉監修(2008)『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 13000』日外アソシエーツ
- 幾田伸司(1992)「中学校詩教材の史的研究」（『両輪』第 7 号 両輪の会 pp. 26-95）
- 幾田伸司(2021)「戦後小学校国語教科書における説明的文章教材の変遷—昭和 46 年度から平成 31 年度を対象として—」（『鳴門教育大学研究紀要』第

36 巻 pp. 34-43）

金子萌(2013)「中学校説明的文章教材の題材・内容の傾向分析—平成 24 年度版国語教科書の場合—」

（『語文と教育』第 27 号 鳴門教育大学国語教育学会 pp. 28-43）

教科書研究センター編(1986)『中学校国語教科書内容索引』（上・下）教科書研究センター

幸田国広(2023)「教科書教材史に関する研究の成果と展望」（『国語科教育学研究の成果と展望Ⅲ』全国大学国語教育学会編 溪水社 pp. 193-200）

日外アソシエーツ(2008)『読んでおきたい名著案内 教科書掲載作品 小・中学校編』

【謝辞】

本稿は、JSPS 科研費 JP21K02580 の助成による研究成果の一部である。教材調査にあたっては、教科書研究センター附属教科書図書館に便宜を図っていただいた。また、目録の作成では、鳴門教育大学大学院生の岸本一貴、佃芽萌里、谷脇諒祐各氏の協力を得た。記して御礼申し上げる。